

一葉の日記

坂本浩

間には、それほど大きな間隔はないのである。
名作「にこりえ」「たけくらべ」を残して、一葉が二十五歳

樋口一葉が明治文学における古い流れの最後を飾る作家であつたということについては、今日ほとんど一定した位置を与えられている。このことはいろいろな点で一葉と類似点をもつている国木田独歩と比較してみると、いつそうそれが明瞭となるであろう。一葉も独歩も明治期における短篇作家としてはユニークな存在である。ふたりとも貧困と病魔によつて、その素質を十分に生かしえないで終つたことも似ている。しかし、この両者の文学作品を読むものは、直ちにその間の相違のあまりにも大きいことに気づくにちがいない。それは少しく誇張していえば、あたかも時代を異にしている感じさえするのである。だが事実においては、一葉と独歩との

の若さで没したのは明治二十九年十一月のことである。このころ独歩は愛妻信子に裏切られて悶々の日々を渋谷の山荘に送つていた。独歩の胸中には「武蔵野」の詩想がすでに芽生え始めている。「忘れえぬ人々」(明治三〇)「源をぢ」(同上)「武蔵野」(明治三一)「鹿狩」(同上)などが発表されたのは、実に一葉の死の翌年から翌々年にかけてであつた。その意味において独歩は時間的には一葉のすぐ後に続いているのである。しかも「にこりえ」「たけくらべ」と、それら独歩の諸作との間には、越えることのできない異質のものが介在している。一葉を古い明治の作家の最後を飾つたものといえるなら、独歩は新しい明治の作家の最初をスタートした人といえ

るであらう。私はここに一葉文学と独歩文学との比較をしようというつもりはない。独歩を頭におくことによつて、一葉文学が明治文学の古い流れの終末を飾つたものであることを指摘するとともに、そのような一般に行われている位置づけの正当なことを、改めて肯定したいと思うのみである。

しかし、古い明治文学の最後の作家としての一葉を規定するとともに、その作風がどのような傾向に立つものであるかという点に進んでくれば、これは文学史的にもまだ明確な定位が与えられていないのである。というより一般に行われている位置づけは、一葉を写実的な傾向において把握し、古風な写実主義の完成をそこに見いだそうとすることに傾いているというほうが、より適切であらう。つまり尾崎紅葉を盟主として展開した写実的傾向の展開の流れに、一葉をも含め考えるというゆきかたである。紅葉の目指した写実主義とそこに生まれた写実的作品は、確かに明治中期の文学の流れを大きく規定するものであつた。そして紅葉の写実をさらに深化したものととして広津柳浪の深刻小説・悲惨小説の存在を考察し、柳浪に見られた現実醜化の極端さをもつと自然に近づけたものとして、一葉文学の位置づけをしようとするのである。このことは広く明治期の文学が写実的傾向をもつて貫かれていたという事実を照し合せるとき、一葉の価値を強く押し出すには、すこぶる好都合な態度ともいえるであらう。その証拠には、紅葉と対立した幸田露伴は、一つの偉大な個

性として孤立しただけで、その後継者をもちえなかつたことを見て、あるいは紅葉の門下から出た泉鏡花が生み出した作風が、独自の変り咲きとしてただひとり孤立していることを考えても、容易にうなずけることと思う。紅葉が確立した写実的傾向は、もちろん後の自然主義における傾向に比べては、おおよそ古風なものではあつたが、ともかくも明治時代を一貫する主流は写実の側にあつて、それと対立する側にはなかつたといえるであらう。天才的な短篇作家としての一葉の位置づけも、かくしてその主流的な写実の流れのなかに把握されがちであつたのである。

かりに一葉文学のピークをなす一つの代表的作品を「にこりえ」たけくらべ」に見いだしてみよう。細かに見ればこの二作品のなかには明らかに違つた傾向がたどられるであらう。「にこりえ」は現実の一角に鋭い凝視の目を向け、そこに見られる現実的矛盾を写実的に追求しようとしたものである。これに対し「たけくらべ」は何よりもまず一葉の詩心が美しい旋律を奏でている。にもかかわらず、一葉を写実の流れにおいてとらえようとする人々は、「たけくらべ」における下谷竜泉寺町の写実的な描写に大きな意味を付与し、「たけくらべ」における写実主義を強調し賞賛するのである。そのような作品における一面を拡大してのぞこうとすれば、写実的といわれる「にこりえ」においてすら、一葉の詩心はその裏側に脈々として流れていることをいうべきではないか。

このような相対的な見かたをもつと広げてゆけば、「十三夜」「わかれ道」「われから」などは、果して写実的な作品であるか、それともその反対といつて然るべきか、これを要するに水かけ論に終りそうである。

私はこのような相対的な作品評価と、その文学史的な位置づけの錯乱に接するごとに、一葉という作家の本質を追求し整理することを考えたいと思う。いついかなる場合においても、作品とは作家の人生的な歩みの一つ一つの足跡であるということは、否定することのできない真理である。従つて作品には作家の生きの姿が、直接的にか間接的にか影を落さざるをえない。その「生きの姿」こそ、その作家の本質を形づくっているものに外ならない。作家の本質を究明し、それを明確に把握することによつてのみ、作品の傾向の相対的な見かたは一元的に解決されるはずである。では、作家の人生的な歩みを再体験することによつて、作家の本質を追求するにはどうすればいいか。それは作家の生きの姿のすべてがもつとも端的に表現されている日記を丹念に調べることである。一葉文学の本質が写実的なものにあるかいなかという問題は、一葉の日記の詳細な考察によつて、正しい解決を見いだされるのであるとともに、一葉の文学史的な位置づけもかくして実際に即したものとなるであろう。私はこの一文において一葉の日記を検討しながら、その問題に関する私の結論を導き出して、大方の御批判を仰ぎたいと思うのである。

二

一葉の日記をひもどくものが、まず感じさせられることは、金銭に関する記事がおびただしく出てくることである。それはほとんど枚挙に暇ないほどであるが、主なものをあげてみると、つぎのようなことが書かれている。

「浅草三枝信三より卅円かる。」(明治廿四・九・)「森照次より八円借金。」(明治廿五・二・)「森より借金の約束を断られ、桃水へたのむ。」(同・三・)「藤田屋来る。金一円かりて兄へ二円ばかり貸す。」(同上)「伊東君より借金。」(同・七・)「母、山崎へ金かりにゆく。」(同・八・)「傘を盗まる、我が家貧困せまりに迫りたる頃とて母君なげく、卅日に山崎に十円返すべきが原稿出来ず。一銭をうる目あてなし。国子の衣類を質入せんといふ。」(同上)「安達に金策に出かけ、不承諾。」(同上)「母、鍛冶町に借金にゆく。十五円かり、山崎に十円返金。」(同・九・)「『うもれぎ』の原稿料十円ばかりをあてに、三枝に六円かる。」(同・十・)「小林君に金かりに母君ゆく。」(明治廿六・一・)「昨日より家のうちに金といふもの一銭もなし、母君これを苦しみて、姉君のもとより二十銭かり来る。」(同・三・)「我が家貧困日ましにせまりて今は何方より金かり出すべき道もなし。」(同上)「三枝君来訪、かりたる金のことにつきてなり。」(同・四・)「西村より一円かる。母、関根へ行く。」(同上)「西村より一円かる。菊池君に

持參。「同・五・」窮甚だし。伊東夏子より八円かる。」

(同上)「著作まだならずして此の月も一銭入金のみあてなし。」(同・六・)「今日は国子誕生日なれども祝ひのばして廿五日になさんと云ふ。」(同上)「金策におもむく。」(同上)「昨日たのみたる金出来ず、此の夜一同熟議実業につかん事に決す。」(同上)

私はこのような記事から、一葉が借金した人々の素性を調べようとする興味はない。また、このような記事の裏にひそむ一葉の貧困生活をことさら強調しようという意志も今はない。ただ私に注意を引くことは、一葉は重なる借金に対して少しの後めたさを感じていないという一事である。少しく誇張して言えば、借りられるだけの人には借りるほうが当然だといった気配さえ見られるのである。これは一葉が金銭問題をそれほど重大事と考えてはいなかつたことを示していると思われる。一葉はそれほど貧困のどん底にありながら、いわば金銭を軽んじているのである。この点に関して考えつくことは、ここには武家風の家風に育てられた一葉の考えかたである。士族にとつて金銭にかかすらわることには一つの恥辱ですらあるという考えが、一葉の心底には流れている。これは明らかに封建的な遺風であるであろう。そしてここにも一葉の思想の古風なところがのぞいているようにべきであろう。しかし、このことは何も一葉に限つたことではない。明治という封建的な残存物を多分に残していた時代相の一般に通じる傾

向であつたのである。

一葉の金銭問題に関する考えかたにおいて、きわめて特色あるところは、むしろ以下の点に見いだすべきである。それは一葉は消極的に金銭を軽んじたというより、貧困のどん底にあつてこそ感得される精神の優位をはつきり見ていたという点である。このような積極的な考えかたが、しばしば借金の際に顔を出して、彼女の日記を明かるく照らし出しているのである。

「晚さんの後ぞとて母君国子籠をたづさへて下りたち給ふはわか茶つまんとて也、世には金殿樓閣に住む人もあるべく綾羅錦しうにほこるもあるべし、借問す綿衣三年改ためず破窓わづかに膝をいゝに過ぎざれど、優々たる春の光春の句ひの身にも心にも家のうちにもみち渡りたる我が親子計たのしきものありや非らずや。」(明治廿五・三・)一方には「金殿樓閣に住み」「綾羅錦しう」を身にまとう人々を見すえ、顧みてわが身は「綿衣三年改ためず破窓わづかに膝をいゝに過ぎざる」を認める。しかし、そこには富者に対する怨恨もなければ憧憬もない。またそこにはわが身に関する卑下もなければ不満もない。あるところのものは、貧しければこそ初めて味わうるわが家の楽しさである。「借問す、優々たる春の光春の句ひの身にも心にも家のうちにもみち渡りたる我が親子計たのしきものありや非らずや。」と記すとき、一葉の心には貧しきものの幸福に対する自信や自持が、あふれ

るばかり満ち満ちていたはずである。これは現実をありのままに直視し、そこに取りあぐべき問題を見いだすというより、現実を越えて精神の優位を誇ろうとする態度に外ならないであろう。

「我が友とする人は家の狭きひろき衣の鮮と弊とをとはず、かざりなき詞かざりなき心をもてこそ交らぬ、もしかして家せまし衣ふるびたりとて捨つる人あらばそはをしむにたらずといふ。」(明治廿五・三)これはあまりにも家が狭いので、もう少し見ばえのいい所へ転居したいと、妹の国子が言い出したとき、一葉がそれに対して答えた一節である。人と人との交わりは心と心との交際でなければならぬ、美しい誠実をそのまま虚飾ないことばによつて通い合わせるものでなければならぬという信念が一葉には厳として存在する。もしわが友が家が狭いとか着物が汚いとかいつて、わが家を訪うことをいやがるとすれば、そんな友人とはさつぱり別れてしまえと一葉は妹にさとしている。数え年でいえばまだ二十一歳にすぎない一葉が、普通であればもつとも服飾に興味あるはずの年頃にありながら、物質を越えた精神の世界をしつかりと把握していたということは、この際記憶されていいことであらう。

「位階何事かあらん、母君に寧処を得せしめ妹に良配を与へて我れはやしなふ人なければ路頭にも伏さん、千家一鉢の食にとつかん。」(明治廿五・九)一葉には以前に許婚者の渋

谷三郎という人があつた。一葉の一家が没落してからこの話はいつの間にか解消の形になつていた。そこに今では栄達の身となつた渋谷が再び求婚する。このとき一葉が書きつけた日記の一節である。昔の許婚者、今の立身、一葉の心に物質的なものを重んずる傾向さえあれば、一家の生活は楽になれるのである。一葉はこの誘いに対して、実に明確に「位階何事かあらん。」と言い切つている。苦勞をかけてばかりいる母さえ安らかな境遇におちつかせ、自分とともに一家の犠牲になつている妹に良縁さえ与ええれば、自分などどうなつてもかまわない。托鉢の僧となつて家々に乞食して歩くとも、義理・人情をわきまえない人の世話には断じてなりたくない。と彼女は思いつめている。安定した物質的生活と精神のありかたを天秤にかけて計量しようとさえしない。前者は初めから一葉にとつては問題にならないことであつたのだ。

その年(明治廿五年)も押しつまつて、一葉の一家はどうして年を越すかという当てすらない。「餅は、家賃は、歳暮の進物は何とせん。」と迷ひ、「岡野の払ひ、榛原の酒醬油を如何する。」と考えあぐむ。思いがけなくその窮場に原稿料が舞い込んでくる。そのとき一葉は書くのである。「いとどのかななる大晦日にて母君家を持ちし以来この暮ほど楽に心を持ちしことなしとていたく喜こばる。」(明治廿五・十二)一円四十銭という金が、この貧困の一家をこれほどの安堵に追いやることができるという現実的問題は、当面の一葉が考

えてもみないことである。「窮すれば通ず。」「棄つる神あれば助くる神あり。」といった諺すら一葉の念頭には浮かばない。「家を持ちし以来この暮ほど楽に心を持ちしことなし」といつて喜ぶ母の様子を見て、一葉自らも心に喜びを感じるだけなのだ。

明治廿六年四月のことである。関根只誠翁が死去した。しかし一葉一家には香花をそなえる金がない。「家は貧せまり米代もえやすからず、邦子衣を質に入れんと言ふ。」という状態であつた。結局、西村より一円かりて、母が関根にくやみに行つたのであるが、一葉はその笑うにも笑えぬわが境遇を、さらりと次の一首に流している。

我こそはだるま大師に成りにけれ とぶらはんにもあし
なしにして

「おあし」(金錢)がないことは「足」がないのと同じ苦しむことだといふのではない。「石の上にも三年」の達磨大師と同じ身分になつたことを、ユーモラスに歌つたまでである。

以上に引用したような箇所は、日記のなかにはまだいくつもある。これらのいつわらない述懐が、借金につづく借金の記事の間に介在して、この日記に明かるい光を点じている。このような一葉の生きの姿こそ、その本質を形成する重要な

根幹なのであつた。繰り返していえば、一葉の心底には、物質的・現実的なものを重視する態度と対立する、精神的・浪漫的なものを生活倫理とする態度が、一貫して強く流れていたのである。というより物質を越えるもの、現実より優位なるものの存在を、一葉ははつきり信じていたのである。一葉に見られるこの態度は、後の自然主義的な作家や、その系統を引く心境小説の作家などと対比して考えれば、さらに明確になるであろう。自然主義が貧困という一事をいかに繰り返し繰り返しその作品に描出したか、また、心境小説がいかに困窮の生活をだしに使用して自己鍛錬の道場にしたか、このような問題については別の機会に触れることもある。

ただ一言つけ加えておきたいことは、現実尊重の写實的傾向が、わが国においては例外なく密接に金錢問題と關係し、そこにじめじめした消極的な私小説・心境小説の世界を小さく描き出すに至つたといふことである。これは明治期の文学が写實的傾向を主流とするといふことと連關して、わが明治小説のきわめて特色ある現象であつた。一葉は境遇からいえば、容易にそのような傾向に加担すべき可能性を十分に与えられていたわけである。にもかかわらず一葉の本質はその味方になることを潔きよしとはしなかつた。これは十分に注意すべきことである。かくして一葉の生きの姿は、現実を超克するものの側において、物質を克服するものの側において、美しい実のりを結んでいつたのである。少くとも一葉日記は

それを生き生きと証拠だててくれている。そこには封建的な考えかたなどというありきたりのことばでは表現しつくせない、もつと大きな大切なものが見いだされるというべきであろう。

三

一葉の日記をひもとくものが深い興味と強い感動を覚えるのは、悲痛なまでに美しい彼女の恋愛の姿であろう。これほど清純な愛情に生き通しながら、一葉はそれを作品には描かなかつた。この意味において私は切に思うのである、たとい一葉のすべての小説がこの世から消滅することがあろうとも、その日記のみは何としても残したい——と。一葉の真価は彼女の日記のみをもつてしても、優に明治の文学史の上に際立つた光彩を放つてあろうことは、私の今も信じていることである。私はここに一葉の恋愛と書きつけてみて、何か心にそぐわない思いに満たされている。「恋愛」ということばはそれほど世俗的な汚れをもつものになり終つてゐるからである。奇をてらう感じがあるであろうが、これからは私は一葉における清純な愛情について語らうとするに當つて、「愛恋」というまだ手垢のつかないことばを用いさせてもらうことにする。

人もよく知るように一葉の愛恋の相手は、その文学の師半井桃水であつた。桃水は本名を列といひ、万延元年の生まれ

であるから、一葉が廿歳で初めてこの師に会つたとき（明治廿四・四・）、桃水は卅二歳であつたわけである。桃水は廿九歳のとき東京朝日新聞に入社し、「海王丸」などといつた通俗小説を書いていた人であつた。もし一葉が桃水を師としなかつたら、桃水は永久に忘れられてゆく運命をもつていたといつてよからう。一葉は友人の野々宮きく子の紹介で、芝区南佐久間町に桃水を訪ねたのであつた。この最初の会見の印象を、一葉はつぎのように記している。「色いと良く面おだやかに少し笑み給へるさま誠に三才の童子もなつくべくこそ覚ゆれ。丈は世の人にすぐれて高く、肉豊かにこえ給へばまことに見上る様になん。」

一葉が桃水について書くこの記述が、ほとんどその外貌についての好感に終始していることは、ここに注意せねばならない。一葉が桃水に敬愛を感じたのは、その文学についての親愛を覚えたからではない。あるいはまた桃水の人物が激しい人生の経験を経てきたというその深奥さに心うたれたからではない。いわば世間知らずの娘が初めて会つた人の印象に好ましいものを感じるのと、それほど違つたところはないのである。一葉は桃水の年齢を「君はとしの頃卅年みそとせにやおはさん」と推定しているが、初めて会つた文学の師の美しい容貌に、心ときめきを覚えているさまが、日記を通して生き生きと感得されるのである。一葉は桃水の裏側まで見通そうという現実的な目を働かしてはいないのだ。少し極端な言いか

たであるが、桃水の現実そのままを見る前に、すでに夢想化し理想化しているともいえるであろう。この日一葉は夕げの馳走になり車で送られて帰宅（本郷菊坂）したのであるが、「君がくまなきみ心ぞへの慕しく」と書かずにはいられなかつたのである。

それから一週間の後、一葉はふたたび桃水をたずねる。

「うしは先の日ま見え参らせたるより、今日は又親しさまざりて、世に有難き人哉とぞ思ひ寄ぬ。」と一葉はその日のことを記している。三日の後、桃水から神田表神保町の下宿まで来てほしいとの便りがとどく。一葉は大雨の中に師を訪ねてゆく、このとき桃水はこのように言つたのである。「余やいまだ老果たる男子にもあらず、君はた妙齡の女子なるを實際の工合甚だ都合よろしからず……余は君を目して我が旧来の親友同輩の青年と見なして万の談合をもなすべければ、君は又余をみるに青年の男子なりとせで同じ友がきの女子と見給ひて隔てなく思ふ事の給ひぬ」卅二歳の男子と妙齡の女子が師弟であることに不都合を感じた桃水は、一葉を男子とみなして交際するから、一葉は自分を女子と考えて隔てなく交つてほしいと言ふのだ。一葉はおそらくそのことばをそのまま書いたのであろう。ことばの裏側にどんなものが隠されているかということすら、すでに一葉には考えられなかつたのであろうか。それほど一葉という女性はいふぶな女であつたのであろうか。このような経過をとつて、一葉の訪問は度重

なつてゆく。

初めて会つた日と同じく、六月に入れば訪問の日には雨が多い。桃水から便りが寄せられ十六日の夜、「何となく心にかゝりて夜一夜いもねず、夜もすがら大雨成し。」と簡明な文章のなかに、一葉は自分の心を隠している。その翌日の訪問の記述は、さらに曖昧となる。一葉はなぜか物思わしげに帰宅しているが、「筆にまかしてかゝるさんもかつは我が身づからやましきこともあり……」と書き、「ともすれば身をさへあらぬさまにもなさまほしけれど……」と書いているにすぎない。そのままに書き記すことは一葉みずからもやましい所があるというのは、いつたい何を指すのか、また、自分の身さえ「あらぬさま」になしたいと感じたのは、どんな理由からであつたか、私どもには一切不明である。ただ明らかにわかることは、その後一葉の桃水訪問は四か月以上も途絶えたという事実のみである。そして野々宮きく子が、桃水は一葉がたずねてくれないのを心配していると話してきたことが記されているのみである。

その間に桃水についてのよくない噂が一葉の耳に伝わつてくる。それは多くは妹の国子が他所で聞いてきたものであつた。桃水は不品行であつて信用できないとも、負債を背負つて行途をくらましているとも、国子は姉に語るのである。このような噂話が一葉の心にどんな反省を与えたものかについては、彼女は一切書いていない。だが、妹がどんな気持ちか

ら姉にその噂話を伝えたかは、おおよその想像はできなくはない。ただこのような桃水にまつわる面白からぬ事件が一葉の師に対する親しみを傷つけるどころか、かえつてそれを増し加える結果になつたことは、その後の二人の交渉が事実として物語つてゐる。一葉が久しぶりに桃水に親しく話すことになつたのは十月卅日であつた。桃水はこの日人目を避けて一葉を隠れ家に誘つた。「君と我とは長火桶ひとつ隔てゝ相對坐しぬ、例のこやかに打ち笑みつゝこゝへ寄り給へなどの給ふ」と一葉は素直に書いてゐる。桃水はさらに一葉が訪ねてくれないために、却つて世間に色々と噂されると言い、

自分はこのような粗野な男子であるが、貴嬢に対して少しの害心ももつてはいないと訴えてゐる。それから約一か月経つて十一月廿四日にも、二人は例の隠れ家であつた。桃水は木綿の古びた綿入れの上にとどらまをまとい、しごき帯の恰好で、人もない小室の内に長火桶一つを間において一葉と話するのである。話題は小説の趣向から、片恋のことに移り、「いでやこの恋斗あやしきものなし」と言い、「君はなぞさは打ちとけ給はぬ」と言つてゐる。この日の日記は、しかし、途中で切れてしまつてゐる。一年後の思い出によれば、「何かあやしきもの語りにほのめかし給ひしことありき」と、これも漠然としか書かれてゐない。いすれにしても、こと桃水に關してのみ想像すれば、この師の一葉に対する態度は、背氣質の女弟子にとつては「あやし」という実感を与えるもので

あつたことは確かのようにである。しかし、一葉はそのような師の態度に対して少しの非難も、いささかの警戒心も感じていなかつたのである。

年は明けて明治二十五年、一葉は廿一歳の春を迎えた。一葉は本郷三丁目まで出かけて桃水に送る年玉を求め、一月八日に年始にゆく。その前日のこと、「明日はかならず降りなるべし」と国子はいやがらせを言つてからかつてゐる。平川町の桃水の本宅は貸家のはり紙がしてあつて、桃水は姿を隠してゐる。一葉は例のうら家をたすね、幾度も声をかけたが返事がないので台所の板の間に土産の小箱を置いて歸つてくる。帰宅後幾度も書き直して手紙を書いたが、「おそれの種」をまきちらしそうなので遂に投函せず終るのである。それより三日の後、桃水から以前の隠れ家にいると返事がくる。さらに三週間の間において、二月三日に一葉は明日訪問したいと葉書を出す。それと引き違ひに桃水からは明日拜顔したいと言つてくる。一葉は「かく迄心合ふことあやしきよ」と喜んでゐる。このようにして、一葉日記の読者にあの異様な感動を与える二月四日の会見が生まれるのである。

明治二十五年二月四日、この日は雨ではなく、雪であつた。一葉は昨年十一月末以来会わなかつたその師に、二か月以上も経つて会おうというのである。雪にもかかわらず約束の日を守つて出かけてゆく。声をかけてみたが返事はない。今日もあのように誘つておきながら留守であろうか。そ

のまま帰る気にはどうしてもなれないので、玄関に上がり込んで待つのである。時はすこしく流れる、一葉はついにふすまのそばまで近よつてゆく。「ふすまの際に寄りて耳そばだつれば、まだ睡りておはすなるべし」いびきの声かすかに聞ゆる様なり」 桃水はまだ寝ているのである。一葉はそれから一時間以上も、寒い玄関に坐つて待つてゐるのである。やつと桃水は目ざめて、寝まき姿のしどけなき様で起きてくる。部屋のなかのろうがわしさもまた極まつたありさまである。

「おのれも何か手伝はし給へ、お勝手しれがたければ教へ給ひてよ、先づこの御裳所かた付けばや」と一葉はいろいろに心くだいて、師の世話をするのである。桃水の話は新しく雑誌「むさしの」を出す計画についてであつた。桃水は手手からしることを作つて一葉に馳走してくれる。勝手元に立つた桃水に向つて隣家の女房が話しかける声が、一葉の耳にもはつきり聞えてくる。「お客様がお楽しみなるべし御浦山しう」知らぬ間に時間は容赦なく経つてゆく。雪はまだしきりに降りつづいてゐる。「暇をこへば、雪いや降りにふるを今宵は電報を發してこゝに一宿し給へと切に給ふ。」もちろん一葉にはそんな思い切つたことはできない。車に送られて桃水の家を辞したが、その帰途「種々の感情むねにせまりて、雪の日といふ小説一篇あまばやの腹稿なる。」この日の日記はここで一応終つてゐる。

一葉は自分の感情をあらわに出さないうで、そのまま事実を

書きつけているにすぎない。私もまたありのままに紹介するにとどめておいた。しかし、この一日の出来事については、日記を読む人々によつて、さまざまな深い印象を与えるであろう。ただこの際ぜひとも記憶しておかねばならぬことは、一葉は後年のあの天才的な女流作家ではなかつたということである。その芽生えを蔵してはいても、彼女はまた小説らしい小説を一篇も書いてはいないのである。それに対して桃水は何といつても文筆で立つ流行作家の一人である。この年若い女弟子と、浮世の辛酸をなめつくした師との間に起つた一小事件なのである。一葉はこれまでと同じく、その日もまた親しみ深い師として桃水に接していたことには変りはなかつたはずだ。

しかし、人によつては一葉のあまりにも予想に反した行為についての疑惑を感じるかもしれない。そこに、たとえ一葉は自覚しないまでも、彼女の心底に隠されていたあまりにも人間的なものを見つけようとするかもしれない。私もあながちそれを否定しようとはしない。確かに一葉はそれを自覚してはいなかつたけれど、いや自覚することを避けつづけてはきたけれど、彼女の心中には桃水に対する切なる愛恋の情が強く流れていたのである。このことは何よりもこの後の一葉の日記が事実として認掘だててくれるのである。それにもかかわらず、男子一人の隠れ家に、その睡眠中に一時間以上も待ち、取り乱された部屋の片づけまで、いそいそとしてやつ

ている一葉の姿には、どこか異常なものが感じられるのである。「おうらやましう」と隣家の女房にひやかされるだけの外観は呈していたはずである。このことをどう解釈すべきであろうか。

私はこの点に關しても、一葉のなかに世間ずれのしない純粹さを見るものである。桃水と一葉との間が、師と弟子という垣根によつて明確に限られているという意識を、一葉は常に忘れてはいない。この昔風の家庭にしつけられた一葉にとつて、それは信賴するにたる拠り所であつた。慕わしき人とは桃水を感じても、自己と同じ高さにおいて結びつけて考えようとする気持ちはいささかもなかつたのだ。そこから、普通の目から見るとは異常の觀を呈することが、彼女の眞実においてはいさかやまに感ぜられる理由が生まれるのである。いわば一葉は初めて經驗される人生の危険な場所において、子供のようにふるまつているのである。このことは先に述べた借金に対する彼女の心構えと無關係ではないであろう。一葉を老成した作家として受けとる前に、私どもはまだ廿一歳の春を迎えて間もない、一葉の若さを心して読みとるべきだと思ふ。

それから二回行われた訪問は、主に雑誌に關するものであつた。桃水は男子は一月交替にして、一葉のみは毎月書いてもらふことを約束し、処女作「闇桜」についても贅辭を惜しまず、「むさしの」はやがて一葉の所有に歸するであろう

と勵ましている。そして三月十八日、初めて桃水は一葉宅をおとすれる。このころ一葉は本郷西片町に転居していた。このときも一葉は長々と桃水の風采について書きとめている。

それは初めて會つた日の日記と性質を同じくして、さらにこまかい。「八丈の下着に茶とこんのたて縞の袖の小袖をかさねて白ちりめんの兵児帯ゆるやかに黒八丈の羽織をき下し給へり、人わろしと聞く新聞記者中にかゝる風采の人も有けりと素人目には驚かれぬ。」「八丈の下着に」から「黒八丈の羽織をき下す」までは、小説中における描写を思わせる。けれど「かゝる風采の人も有けりと素人目には驚かれぬ」に至つては、一葉の本質がそのまま顔を出している。この隆とした桃水の風采は一葉の母にはいい印象を与えた。「母君は実によくしき人哉、亡泉太郎にも似たりし様にて温厚らしきことよ、誰は何といふともあやしき人にはあらざるべし、いはゞ若旦那の風ある人なりなどの給ふ。」しかし姉思いの国子にはそうは受けとれなかつた。「国子は又そは母君の目違ひ也、表むきこそやさしげなれあの笑む口元の可愛らしきなぞが権謀家の奥の手なるべし中々心はゆるしがたき人なりなどいふ。」この母子三人の見かたのうち、どれが最も桃水の人物を見通しているかということをおは問おうとはしないでおく。ただ一番年の若い国子が、桃水との關係においては最も客觀的にありえただけに、それだけ鋭く裏側まで見ぬこととしていたことに注意したい。この意味においてかつて負し

きものの幸を妹に説ききかせた姉の方が、かえつて今は夢想の世界に生きてゐるわけである。「いでやこの恋斗あやしきものはなし」と語つた桃水のことばは、以外なところでその実例を供することになつたのであつた。このようにして春三月は一葉の創作への門出を祝して暮れていつた。

四月も末に近くなつて桃水は病気になる。朝夕花柳のちまたに過ごしてきた桃水にとつて、借財と病氣とは思ひにまかせぬ逆境をもちたしたのである。一葉がたずねていつても不機嫌で、異人のように交り果ててゐる。一葉は「いでや今日こそは御心取らんとて出たつ」けれど、帰途は彼女も快々として楽しむことはできない。母も妹も一葉の様子を見て心配する。桃水は入院して再三にわたつて痔の手術をしたが、はかばかしくない。一葉はあるいは下谷の伊豫紋の口取を買い、あるいは藤村のむし菓子をととのえなどして、しばしば病氣見舞にいつてゐる。しかし、この間において一葉と桃水とを永久に隔てることになる事情は、着々として準備されていたのである。

四

明治廿五年六月十二日は一葉の師中島歌子の老君の十日祭の日であつた。一葉は桃水との問題にかかちつて、ひさしく無沙汰になつてゐた恩師を小石川にたずねた。すると一葉にとつては思いもかけないことであつたが、同門の弟子たち

の一葉に対する態度がすっかり変つていたのである。まず伊東夏子は半井との交際を断つわけにはゆかないかと忠告し、どこかよそよそしい態度である。それからつづいて四日間、一葉は一つの疑問をいだいて、毎日中島家をたずねてゐる。田中みの子が折にふれて皮肉らしいことばをはさむのに氣づいたのは二日めであつた。その他の友人たちも以前とは違つた目で自分を見てゐるようである。ついにたまりかねた一葉が中島歌子に率直に問ひだしたのは三日めのことであつた。その師はいぶかしげに一葉を見守つてゐたが、やがて「扱ては其の半井といふ人とそもじ、いまだ行末の約束など契りたるにては無きや」と言うのである。一葉は啞然として驚いた。師の話によれば桃水は一葉のことを自分の妻だと世に公言してゐるというのである。この取り沙汰を知らぬものはこのあたりには一人もないというほど浮き名が立つてゐる。——と話されて、一葉は「浅ましとも浅まし」と歎じてゐる。

一葉の心に強く湧き起るものは、桃水の不謹慎な言動に対する裏切られた思ひと、世間にそれほど浮き名を流されて今まで少しも知らなかつた自分の軽卒さについての後悔であつた。そのような感情に支配されて、一葉は深く自分の内面を突きつめてみることもなく、師に対してはつきりと宣言してしまつたのである。「明日はとく行て半井へ断りの手段に及ぶべし」と。中島師が一葉に桃水との縁切りについて教え

た口実は、小石川の自分の家には手伝いの人がないから、今しばらくその方の仕事を手伝うことになつた、尾崎紅葉のこととは断つてくれ——というのであつた。紅葉のことというのは、桃水は一葉を紅葉に紹介してやることを申し出ていたからである。もし一葉が紅葉に会つていたらばどうなつていたらうかということは、私どもに非常な興味を覚えさせる問題であるけれど、中島の入れ智慧によつて、このことは遂に実現されなかつたのである。いつの時代においても派閥の争いというものは絶えないものであつて、門下生の所屬に對してはその師匠は常に神経質なものだ。一葉はその敬愛する師の桃水との間をこうして裂かれることになつたのである。

一葉が中島師との約束に従つて桃水を訪ねたのは六月廿四日のことであつた。出かけるに先だつて家でもさまざまに相談し、返すべき書物をもつて出かけた。「火桶の左右に座をしめつゝものがたりしめやかにす、情にもろきは我が質なればにや是を限りに今よりは参らじと思ふに何ごとゝなく悲しくさへ成りぬ。」と一葉は記している。桃水は先頃野々宮に一葉のことを称え、自分でもし家を出ることが出来る身ならば、何とかして貰いたいなど話したことがあつたが、それが噂の原因になつていたのであると語り、訪問はやめたまえ、しかし折ふしは音すれたまえ、良縁あれば嫁したまえなどと語るのであつた。そこに国子が迎えにくる。家でも自分たちのことを気づかつてゐるらしいと一葉は感じさせられる。そ

の後一葉と桃水との間には手紙のやりとりがあつたが、七月十二日に中元をもつて桃水を訪ねたのが、いよいよ最後の会見となつた。桃水は何処かへ転居しようとしてあわただしかつたので、物語ることもなく二人は別れたのであつた。後に一葉は書いてゐる。「七月十二日に別れてより此のかた一日も思ひ出さぬことなく……」と。

五月廿九日の日附のある日記は、おそらく桃水と別れようとするころ書かれたものであろう。この日記の初めの二行だけは五月廿九日の記事であるが、三行目からは一葉が桃水に別れるときの述懐である。この日記は一葉の心境を知る上にきわめて大切なものであるが、日附の關係ですつと以前に入られてゐることは注意せねばならない。一葉はまず自分のかの人に心ゆるしたこともなく恋し慕わしと思つたこともなかつたと言きながら「此の頃降りつゞく雨の夕べなど、ふと有し閑居のさま、しどけなき打ちとけたる姿などそこはかたなくおもかげに浮びて」と書き進み、雪の日の雑煮、母への土産、しばしばしとひきとめられたこと、わがために雜誌創立されたこと、手すから五もくすし作つて馳走せんと約束せられしことなど、次から次へと思い浮べてゐる。「有し頃恋しう、世の人うらめしう今より後の身心ほそうなど取あつめて一つ涙にひぬものから……」と書きつづけ、桃水の輕卒を責め、わが身の不謹慎を悔んでゐる。かと思つと、「いでや世の人は何ともいへ我にけがれなく、かの人清くさへあら

ばそしりは厭ふ処ならず、猶今の御住家尋ねあて今までの如く只兄君としたしまんか」と書き、しかし相手は美形の人、「それ故われかばかりに思い慕ふと言はれんこと口惜し。」とも書いてある。

細かに気をつけて読んでゆくと、思い乱れた一葉の心が左に右へと揺れ動いている様子が実に明確にたどられるのである。いやそれよりも大切なことは、意識の上へのほせては一葉は桃水に対する愛恋の気持を否定しようとしていても、意識の下においてはどれほど深くその師を恋慕つていたかわかるのである。この一葉の悲痛な愛情は、桃水と別れてしまつてから、さらに一層深くなつてゆく。野々宮が一葉をたずねて桃水のことを伝えたとき(八月七日)一葉はその思いを和歌に託してつぎのように歌つてゐる。

吹風のたよりはきかじ萩の葉のみだれて物をおもひもぞ
する

親しい友から桃水のことを聞いただけでも一葉の心は思い乱れるのである。八月廿一日の夕べには、妹の国子と共に散歩に出かけ、九段下まで歩いて桃水の寓居をよそながら眺めている。その日は野々宮から桃水の妻の候補者の写真を見せられた日であつた。その翌日、昔の許婚者の渋谷三郎が来訪している。渋谷が十九歳、一葉が十四歳のころ、一葉の父

は将来この二人を結婚させようと考えていたのであつた。この話は一葉の家が没落してから一時解消の形になつていたが、越後で検事の地位についていた渋谷は、今改めてそれを復活しようというのであつた。さらにその翌日も渋谷は訪れてきたが、その高慢な態度に不快を感じた一葉は、ともに写真をうつそうという申し出に対しても、きつぱりと断つてゐる。先ほど日附のことで注意しておいた五月廿九日の日記の終りの数行は、明らかにこのころ書かれたものである。一葉の心底には一時として桃水のことを忘れられてはいなかつたのだ。「ある時は厭ひ、ある時はしたひ、よ所ながらもの語りきゝて胸とどろかし、まのわたり文を見て涙にむせび、心緒みだれ尽して迷夢いよ／＼闇かりしこと四十日にあまりぬ」と彼女は書いてゐる。渋谷の求婚をはつきりと断つたのは九月一日。その後の一葉の日記は事につけ折にふれて、桃水への愛恋の思いに満たされてゆく。それは日を経るにつけて、さらに深くさらに純粹に昇華されてゆくのである。

その頃一葉の伯父が腫物を切断するため入院したことがあつた。そこに漂う石炭酸のにおいから、一葉の思いは桃水の病中へと飛んでゆく。桃水は数千の借財に苦しめられながら、氣むすかしく狭い病室に横たわつていたが、ある日一葉に「樋口さまは我がせがれに逢ひ給ひし事ありや」と尋ねたことがあつた。一葉が笑いながら「いなまだ」と答えると、桃水はやおら起き出して抱いてきたのは一尺ばかりの人形で

あつた。自分は小説を書き終るごとに、そのなかの主人公を人形に見たてて一つずつ買うのが習わしになつてゐるといふ。一葉は思はずその人形を抱き取つて頼みをしてゐる。その日の思い出が約半歳後の今ありありと蘇つてきたのである。この日の日記は一葉の絶えがたい思いを伝えて、悲しいまでに美しい。十月廿四日には桃水の下婢にあい、昔の師の近況を聞くことができた。一葉はその夜「万感万歎この夜睡ることかたし」と書きつけてゐる。

一葉が桃水に最後の別れを告げてから、ちようど四か月の月日が流れた。桃水はそのころ三崎町へ葉茶屋の店を出してゐたが、一葉は人目を避けてたずねてゆく。十一月十一日のことである。「月日隔てゝものぐるほしきまでおもひみだれたるを君はさしもおぼさじかし、心にもあらぬやうなる別れのその折はさまざまいひさわがれたる人ごとのつらさに何ごとをおもひ分くるいとまもなかりしを今さらにとりかへさまほしうおぼゆるぞかひなき」と一葉は書くのである。あまりにもばつとひろがつた浮き名に、自分の心の真実をしかと見わくる余裕もなく、桃水と別れてしまつたことを、一葉はしみみと後悔するのである。しかし返すに由ない昔である。その後月日を経るに従つて「ものぐるほしきまでおもひみだれた」一葉であつた。ここには失われたがゆえに、いつそうちなる思いにまで昇華された彼女の愛恋が、あたかも義太夫のさわりのように歌われているのである。久しぶりに見る慕

わしい桃水は、病氣のためやせ、商人の姿に交り果ててゐるのだ。一葉は人なきをうかがつて、つと桃水の身近にさし寄つて、「何は置いて御目にかゝることのいとはるかなるが口をしろこそ、何事もうき世に申合はず人なき様にて心ぼさを堪がたし」と、切なる思いをわずかに訴えるのである。桃水は「此のうら道いとさびしく人めといふものふつにあらねば此処より立寄り給はん誰かは見とがめ申べき」とささやいてゐる。この日記は小説の一場面というより、歌舞伎の一場面さえ連想させるであらう。しかも一葉はこの経験を活かして文学の世界に生み出すことをしなかつた。それは作品化するには、あまりにも悲痛な彼女の心の真実であつたからであらう。

十二月に入つて、朝日新聞に連載されていた桃水の代表作「胡砂ふく風」が出版された。その翌日、一葉は堪えがたい思いをもつて、昨年の今日を思い起してゐる。大晦日には三崎町まで出かけ桃水の店先だけを眺めて歸つてゐる。年は明けて明治廿六年の新春を迎えたが、一葉の心は新しい希望へとは向かわないで、たえず過ぎし日の思い出に歸つてゆく。今年もまた雪の日がめぐつてきたのである。一月廿九日には雪降る夜を写した美しい日記を書いたあとに、一葉は一首の和歌にその心懷をもらしてゐる。

降る雪にうもれもやらでみし人のおもかげうかぶ月ぞか

「恋はあさましきもの成けれ、心をつくし身をつくして成りぬべき中ならばこそあらめ、この恋成るまじき物と我からさだめてさても猶わすれがたく、ぬば玉の夢うつゝにおもひわづらふらんよ。」(二月五日)一葉は桃水に初めて会つた時から六百六十余日の後に、桃水に對する心を「恋」ということばに表わしたのである。しかし、心そのものはこの表現にはるかに遡つていたことを、もはや私どもは否定しないであらう。一葉の心にはきわめて素直な深化がなされていつた拳句、今こそその心とこの「恋」ということばが、自然に同化一致したのである。桃水はかつて「この恋斗あやしきものはなし」と一葉に語つたことがあつたが、同じことばは全く違つた内容をもつて、ふたたび一葉に蘇つたのであつた。

二月廿三日の夜のことである。突然思いがけなくも門をたいて桃水が一葉宅に訪ねてくる。「其人なりと聞くまゝに胸はたゞ大波のうつらん様に成ておもひがけずたゞ夢とのみあきれにけり、立出て門のと開けて例のもの静かに立入る姿うれしなどはしばし心地さだまりて後こそ、何事も露の中にさまよふ様なり、明けぬれど暮ぬれど嬉しきにも悲しきにも露わすれたるひまなく夢うつゝ身をはなれぬ人のいとど此一日二日空にまたれて訪はるべき中にもあらぬをあやしう人づつての便りもがな、せめては文にても見まほしきなど人にい

はれぬ物をおもへば幾度かぞに出で立つくし、あらぬ郵便にたばかられて心恥かしかりしも一度二度ならず、いふべき事も覚えず問ふべき事も忘れて面ほてりのみいと堪がたし」桃水は「胡沙吹く風」上下二巻を持参したのであつた。一葉はその夜この書をひもといて晝の鐘をひとり聞いたのである。「桃水うしもとより文章粗にして華麗と幽邃とをかき給へり」しかし、一葉は或いは喜び或いは悲しみながら読みふけるのである。それは「編中の人物活動するにあらで、我が心の奥にあやつるものあればなるべし」たとえこの小説が浮き世の捨てものにならうとも、自分にとつてはこれほど生粹の友がまたとあらうか。「孤独かけほそく暗雨まどを打つの夜人しらぬおもひをこまやかに語りてはどかる所なくなげきもし悦もせんは、うつせみのよにもとめて得がたき所ぞかし」

二月廿七日は昼ごろから雪となつた。「万感こゝに生じて散乱の心ことに静めがたし、我が雪の日をめぐるはめぐるにあらでかなしむなりけり。かの火桶をはさみてものがたりのどかに手づから調理し賜はりししるこの昔し、恋も悟もかの雪の日なればぞかし。」商人の話に三崎町の葉茶屋の話が出て、忘れぬものを又さらにおもい出させたのは三月十二日。

くれ竹のよも君しらしふく風のそよぐにつけてさわぐ心
は

まちぬべきものともしらぬ中空になど夕ぐれのかねの淋しき

一葉が桃水からもらつた手紙をくり返しくり返し読んでみたのは三月十五日。

くり返しみるに心はなぐさまで涙おちそふ水くきのあとこの春は一葉には心悲しい春であつた。

春雨は軒の玉水くりかへしふりにしかたを又しのべとや春雨にふりにし中よわか草のまたもえ出てものをこそおもへ

もゝの花さきてうつらふ池水のふかくも君をしのぶ頃哉
「もゝの花」池水は、いうまでもなく「桃水」である。

おもひやる心かよはどみてもこんさてもやしばしなくさめぬべく

「源氏物語」における六条の御息所の生霊も、今の一葉には現実なのであつた。

五月廿五日の日記は、私どもの忘れることのできないものである。それは一葉に結婚の話がもちあがつたときである。

一葉はこの話をきつぱりと断り、つぎのように記している。「此の一人を厭ひぬるならばこそあらめ、天地の間乾坤のうち形かたちの夫はまうけじとさだめけるをや。」結婚を斥けるのは相手の人がいやだからだけではない。この広い宇宙の中において「形の夫」はもたないと決心している自分なのだというのである。「形式の上だけの夫」を斥ける心は、「魂の夫」を思うことから出ているに違いない。私にここに、その「精神上の夫」こそ、一葉の師半井桃水であつたと書きつけても、もはや否定する人はないであろう。その二日後のことである。「憂ひ来たりては彼の人をおもひ、力よわくしては彼の人をおもふ、よし今は更に人ともいはじ、清らけき眼ともいはじ匂ひやかなる口ともいはじ、何と得しれぬ一物の唯其の人の名のりするものゝひし／＼と身にせまりくるこそ悲しけれ。」思い出の中に生き生きと再生する桃水その人すら、すでにそこには消え失せている。清らかな目も、匂ひやかな口も、もはや存在しないようである。何ともいうことのできないある物がひしひしと身に迫る思いである。それを突きつめてゆけば死以外にはないであろう。

もろともにしなばしなんといひのるかなあらむかぎりは恋しきものを

かなもじ二十九字のほか、たゞ一もじだけ漢字で記された「恋」という語を一葉はどのような気持で書いたのであろうか。心して読むとき、私どもにはこの一つの漢字が異常なまで切迫した感じをもつて強く訴えてくるのである。

五

私は一葉の作品における相対的な評価と、その文学史的な位置づけの錯乱に対して、一つの解決の端緒を見いだそうとして、彼女の本質を「生きの姿」たる「日記」に探つてみたのである。一葉日記に見られる金銭問題についての一葉の態度には、物質的・現実的なものを重視する態度と対立する、精神的・浪漫的なものを生活倫理とする態度が、一貫して強く流れていることに注目した。また彼女の愛恋の姿に深く思いをひそめていつて、初めから一葉は桃水の現実そのものを見きわめようとしてはいなかつた所以を指摘した。彼女の愛恋の姿は現実における二人の結びつきという方向を辿らないで、自ら相手を失うことによつて、自分の心のなかに再生した面影を日一日と昇華してゆくことの方に向かつたことを見つけた。それは悲しいまでに美しく純粋化されていつて、最後にはこの現世を否定する境地まで入つていつたのである。

このことは一葉の宗教的な悟達へのあこがれと無関係ではない。いわば愛恋の成就を現世的なものに求めないで、彼岸の世界に祈り求めたともいえるであろう。このような愛恋の「生きの姿」をこそ浪漫的と呼ばないで、どこにそのような傾向を見いだしえようぞ。しかも、金銭の問題に關しても、愛恋の問題に關しても、貫くところはただ一筋である。ここには一葉の本質がはつきりと打ち出されている。

名作「たけくらべ」が発表されたとき、森鷗外や幸田露伴が絶讃し、「この人にまことの詩人といふ名をおくことを惜しまざるべし」と評したのは、この二人の偉大な作家の内部に潜む美しい詩心が、一葉の本質を直観的に把握したものである。改めて考えていいことである。一葉の本質には、実にこのような詩心、このような浪漫的なものが、強く一貫していたのである。今後さらに長い生命を許されていたらと想像してみること、一葉を愛惜するものの特権であろう。そのとき一葉が自分の本質をはつきりと自覚し、それを作品の世界に具体化してゆくことを想い見るとき、私には一葉文学の正しい評価と位置づけとが予想されるような気がするのである。それは一葉を従来のように写真主義の側において位置づけることではなく、浪漫主義の側にあつて定位することではなければならぬであろう。

(本学教授)